

国際シニア合唱祭

ゴールデンウェーブin横浜

4

彩の国プラチナ混声合唱団

「春の日」を歌う

作曲家上田真樹先生をお迎えして

2024年3月15日

彩の国プラチナ混声合唱団の4回目の練習は3月13日(水)、作曲家上田真樹先生をシーノ大宮10F多目的ホールにお迎えして行いました。

今回採り上げた作品は、林望の五つの詩「時の逝く^い、「家居^{いえ}に」、「鎮魂^{じんこん}の呪^{じゆ}」、「死は安らかである」、「春の日」に作曲した<混声合唱とピアノのための組曲『鎮魂^{じんこん}の賦^ふ』>の終曲「春の日」です。

この曲は「死を悼むレクイエムではなく、温かい気持ちで死者の魂と心を通わせられるようなレクイエム」として無宗教のレクイエムという位置づけです。混声合唱版が先に発表され、のちに男声合唱にも編曲されています。



前方だけ日差しが強かったのでバランスが悪くなってしまいました！

人の「体」は終わっても「魂」はつながってゆく

上田先生には先ず現状の演奏を聴いて頂いたあと、曲に対する思いや、こう歌って欲しいというお話を頂きました。

この曲の元になった詩は、詩人の林望さんがお母さまを亡くされたときに書かれた12篇の詩からなるもの。人間は太古の昔からいつしか亡くなるが、どの宗教に関わらずそのことを悼む気持ちは変わらない。人間のいれものとしての「体」は終わっても「魂」はつながって行くという思想で書かれている。そこで、『鎮魂の賦』^{ちんこん ふ}という組曲も最初の曲と最後の曲がぐるりとつながって戻って行く形を想定し、同じ調性になっている。黒鍵を多用しているのは、この世にはない浮遊した感じを出したかったから。この曲は比較的若い人たちが歌ってくれることが多いけれど、詩の内容からしてどちらかというと人生経験を積んだ方が歌ってくれたほうが合うのではないと思う。

「春の日」は極めて印象的なピアノの前奏から始まります。元々は鳥の鳴声のようなフルートのパートだったといいます。

林 望 詩
上田真樹 曲

“a piacere”（ピアチェーレ：自由に）と指示しているが、ここは文字どおり自由に弾いてほしい、その後始まる合唱は“*Andante*”（歩くような速さで）としているが、葬送行進曲のような厳かな雰囲気^{おごそ}、テンポで歌ってほしい。

“*a piacere*”について、全日本合唱連盟「ハーモニー冬号」(2024年1月)に江上孝則先生(指揮者)が、つぎのような解説を書かれています。

「ピアノパート、或いはオーケストラパートが休みの時に、歌のパートに“*a piacere*”と書いてあることがよくあります。『自由に 任意に』と訳されています。…“*piacere*”は動詞も名詞も同じ、動詞は気に入る、好むで、名詞は楽しみ、好み、喜び、意志です。…自分が望む好ましい状態に身を置く心地よさを味わっているのです。演奏する際には‘あなたの心が満足するように楽譜に縛られず自分の意志を思い通りに(自由に)表現しなさい’というメッセージが込められているのです。」

途中43～60小節に出て来るソロの部分は、愛する人を失い悲しみに沈む人の内面的な表現であり、感情であり、その背後に静かに流れる合唱は、空高くから故人の魂が、悲しむものではない、とあたかも後光が差すように包み込むかのような、遺された人と魂が会話しているような形になっている。このようなことを想像しながら歌ってもらえるとよい。

Tranquillo
Tenore ossia Soprano Solo
43
かなしみはいつかうすれるとも
Tranquillo
pp

高い音の部分では難しいと思うのではなく、そこから離れてイメージのところで歌った方が歌いやすいと思う。ソロはきれいに歌うというより、噛みしめるように感情を爆発させてよい。現実には切ったら血が出る生身の人間がいて、その後ろから天使の合唱が慰めるように流れてくる。こうすることで音楽が立体的になり、歌うことが苦しくなくなるのではないかな。

全体的にテヌート「-」は、強くということではなく、ことばを大切に歌って欲しい。

95
てんちにいまあまねくはる
ff
allarg.
てんちにいまあまねくはる
ff
ben ten.
allarg.
てんちにいまあまねくはる
ff

60小節からはじまる「陽よ、昇れ！ 光よ、輝け！ …」の *p* は「歌い過ぎないこと」、そこから *f* まで3段階で次第にクレシェンドしてゆくが、そこは力を込めるのではなく宇宙が広がってゆくイメージがよい。20人の合唱団ではなかなかむずかしいが、100人の合唱団ならレンジを大きくすることができる。フォルテは大きくするというより声を開放してあげるといったイメージがよい。



(Wikipediaより抜粋)

『鎮魂の賦』は、2007年(平成19年)第18回朝日作曲賞応募作品として混声合唱版が作曲され、同賞を受賞した。選考では審査員5人中4人が賞に推す圧勝で、「詩への共感、それゆえの調性や響きの選択、構成の力など、よく練られ、考えられている」、「多くの合唱団が喜びをもって歌うことのできる作品」との評を得た。

林望の連作詩『鎮魂十二頌』から5編を選んで作曲した。上田は2003年に『鎮魂十二頌』全編に作曲した歌曲があり、これを合唱に改作したものである。曲を貫くテーマは**無宗教レクイエム**である。「誰か特定の人のためのレクイエムではなく、何か特定の宗教のためのレクイエムでもない。死を悼むレクイエムではなく、温かい気持ちで死者の魂と心を通わせられるようなレクイエム。すべての人がどこか懐かしく思えるような、無宗教レクイエム。そういう鎮魂曲を書いてみたい」、「日本人が日本語で歌えるレクイエムを書いてみたい、そんな風に思いながら作曲しました」

2014年(平成26年)には慶應義塾ワグネル・ソサイエティー男声合唱団の委嘱により男声合唱にも編曲され、同年11月22日、同団の第139回定期演奏会(於:昭和女子大学人見記念講堂)において、指揮:佐藤正浩、ピアノ:前田勝則により初演された。





加藤良一実行委員 上田真樹先生

文責:加藤良一(彩の国プラチナ混声合唱団)



[Back](#)

[Home](#)

[彩の国プラチナ混声合唱団TOPへ](#)

[HOME PAGEへ](#)